静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第17集

藤守遺跡Ⅴ

静浜基地（23）埋蔵文化財調査報告書

２０１２

静岡県埋蔵文化財センター

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第17集

藤守遺跡Ⅴ

静浜基地（23）埋蔵文化財調査報告書

２０１２

静岡県埋蔵文化財センター

序

藤守遺跡は、大井川が下流域に形成した扇状地にある遺跡です。この遺跡の存在は戦後間もなくから知られていたようで、地元の方による発掘などで、古墳時代～古代の土器や木器などが出土したとの記録が残っています。そして、1980年には航空自衛隊静浜基地の整備に伴って、静岡県教育委員会が発掘調査を行い、弥生時代から中世に至る各時代の遺物や中世の寺院跡と推定される巨大な柱の痕跡などを発見し、藤守遺跡がこの地の重要な遺跡であることを明らかにしました。

その後も財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所による４回にわたる発掘調査や数々の確認調査によって、藤守遺跡はますます重要な遺跡であることが確かめられてきました。

今回、航空自衛隊静浜基地の整備に伴い、静岡県埋蔵文化財センターが発掘調査を行いました。調査面積は決して広くありませんが、1980年、静岡県教育委員会による発掘調査で大きな成果をあげた地点に近いため、今回も調査成果が期待されました。

発掘調査では、かつて大井川が作った支流の跡に当たり、自然流路と溝を検出しました。このうち溝については、流路とは方向が異なるため、人間が掘ったものと思われます。水田に水を引くための水路だったのでしょうか。また、古墳時代と平安時代の土器も出土し、今回のような集落域を外れた部分でも人間活動の痕跡が残っていることがわかりました。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。最後になりましたが、本発掘調査にあたり、南関東防衛局、航空自衛隊静浜基地ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

平成23年２月

静岡県埋蔵文化財センター

所長　勝田順也

例　言

1　本書は静岡県焼津市藤守706-1にある藤守遺跡の調査報告書である。
2　調査は、航空自衛隊静浜基地の整備に伴う埋蔵文化財発掘調査として、防衛省南関東防衛局の委託を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
3　本調査は平成23年７月～平成23年10月、資料整理は平成23年11月～平成24年２月に行った。
4　本遺跡の調査体制は下記のとおりである。
　所長　勝田順也　次長兼総務課長　八木利眞　主幹兼事業係長　村松弘文　総務係長　瀧みやこ
　調査課長　中鉢賢治　主幹兼調査第一係長、調査担当　富樫孝志
5　本書の執筆は富樫が行った。
6　本書の編集は、静岡県埋蔵文化財センターが行った。
7　以下の業務について外部委託によって実施した。
　現地掘削業務　株式会社橋本組
　現地測量業務　株式会社フジヤマ
　整理作業・保存処理業務　株式会社パソナ
9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

目　次

序・例言
第１章　調査の概要
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 1
第２章　遺跡の概要
　第１節　地理的環境と歴史的環境 …… 3
　第２節　過去の調査 …… 3
第３章　調査の成果
　第１節　調査の方法 …… 5
　第２節　基本層序 …… 5
　第３節　発見された遺構と遺物 …… 8

図版目次

第１図　藤守遺跡の調査地点 …… 2
第２図　周辺遺跡分布図 …… 4
第３図　大井川支流分布図 …… 6
第４図　調査区西壁断面図 …… 7
第５図　１面目遺構分布図 …… 9
第６図　溝01平面図・断面図 …… 10
第７図　２面目遺構分布図 …… 11
第８図　出土遺物 …… 12

写真図版目次

図版１　調査区全景（北側眺望）
図版２　１面目完掘状況
図版３　基本層序
図版４　溝01完掘状況
図版５　溝01断面、流路群断面
図版６　自然流路02、自然流路02遺物出土状況
図版７　出土遺物

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

藤守遺跡は、1960年代から数度の発掘調査が行われ、古墳時代～鎌倉時代の集落が発見されてきた。そして、当地の拠点的集落と考えられている遺跡である。

藤守遺跡の範囲にかかっている航空自衛隊静浜基地で、管制塔を新設する工事が計画されたため、防衛省南関東防衛局と静岡県教育委員会文化財保護課が協議を行い、平成22年度に静岡県教育委員会が確認調査を行ったところ、工事予定範囲内で、奈良・平安時代～中世の土器を含む包含層と、溝もしくは水田の畔と思われる遺構を発見した。

この結果を受けて静岡県教育委員会は本調査が必要と判断し、南関東防衛局と協議を行い、平成23年度に本調査を実施することとなった。

今回の調査は５次調査になる。これまでの調査地点を第１図に示し、調査原因と報告書を下記に示す。

１次調査
調査原因：平成12年度（主）焼津榛原線緊急地方道道路改善（Ｂ）工事
報告書：『藤守遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2002年
２次調査
調査原因：平成14年度（主）焼津榛原線緊急地方道道路改善（Ａ）工事
報告書：『藤守遺跡Ⅱ』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2003年
３次調査
調査原因：平成16年度（国）150号道路改良（地域連携２Ｂ）
報告書：『藤守遺跡Ⅲ』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2005年
４次調査
調査原因：平成20年度静浜基地（20）埋蔵文化財調査
報告書：『藤守遺跡Ⅳ』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009年

第２節　発掘調査の経過

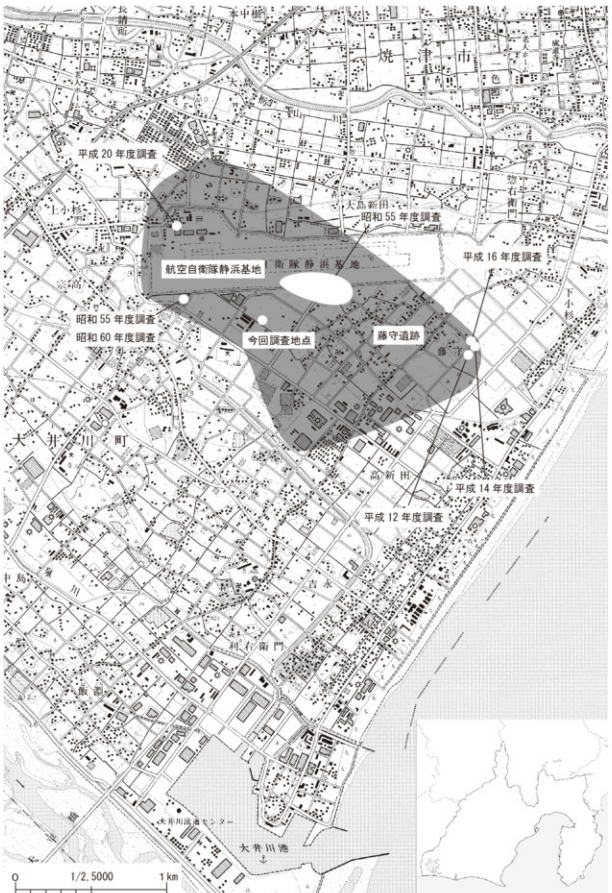
本調査は平成23年７月１日から実施した。掘削業務や測量業務の契約等の手続きの後、８月２日から現地事務所を設置するための整地作業を開始した。８月10に整地作業が終了し、コンテナハウスや仮設トイレ等を搬入した。８月15日には南関東防衛局の監督員立ち会いのもと、調査区を設定した。

８月17日から表土除去を開始し、確認調査で遺物包含層と判断した黒灰色粘質土まで掘り下げた。

この時点で、壁に多くの流路の断面が確認できた。この所見から、藤守遺跡は、大井川が平野部に流れ込んで形成された扇状地上の微高地にあると考えられているが、今回の調査地は、集落のある微高地には当たっていないとの見通しをつけた。そして、確認調査で出土した古代～中世の土器は、これらの流路から出土したと考えた。

一面目では溝を検出し、平安時代の土器が出土した。一面目調査の後、遺物包含層を掘削し、９月には二面目の調査に入った。二面目でも流路を検出し、古墳時代の土器が出土した。途中、２度の台風来襲を受け、現地調査が中断したが、９月末には全体写真を撮影し、現地調査を終了した。

整理作業は島田事務所で行った。土器の分類、接合、実測、トレースといった作業と並行して遺構図を作製した。そして、１月初旬に原稿を印刷所に入稿し、２月24日に報告書を刊行した。



第１図　藤守遺跡の調査地点（国土地理院発行1/25,000地形図「住吉」を加工）

第２章　遺跡の概要

第１節　地理的環境と歴史的環境

藤守遺跡は、第２図に示したように大井川が形成した扇状地では唯一の遺跡で、周囲４～５km四方には遺跡がない。藤守遺跡を巡る環境を考えるには、周辺の遺跡との関係よりも、このような場所に遺跡が形成された要因を探る方が有益と考えられる。

静岡県最北端から流れてくる大井川は、山岳部を南下し、牧ノ原台地の手前で東に向きを変える。志太平野に入ると、第２図で「現在の大井川」と表記したあたりで南東に向きを変えて太平洋に流れ込む。奈良時代以前は、第２図で「旧大井川１」と示したあたりを流れていたらしく、これが現在確認できる最古の流路である。その後、平野部に堆積した土砂により、しだいに流れる方向が南側に折れ曲がるようになり、奈良時代に入る頃には、第２図で「旧大井川２」と示したあたりを流れていたらしい。そして、平安時代以降は、現在の流路に近くなったとされている。

以上は本流の変遷であって、大井川も大河川の例にもれず、増水の度に多くの支流を形成した。大井川の「井」は湧水のことで、転じて川を意味する言葉でもある。したがって、「大井」とは「大いなる川」と言う意味で、大井川の規模の大きさや水量の豊富さを物語っている。

大井川が形成した支流の痕跡を第３図に示す。非常に複雑な編み目状の支流が形成されているが、藤守遺跡付近は周囲に比べて支流が少ないことがわかる。このことは、藤守遺跡付近には大井川の増水時にも冠水しない安定した微高地があったことを示している。大井川の氾濫にさらされ続けた扇状地で唯一の遺跡として藤守遺跡が形成されたのは、この微高地があったからである。

第２節　過去の調査

藤守遺跡の存在は戦後間もないころから知られていたようで、戦後、地元の人達によって発掘され、刀子や田下駄などが出土したらしい。また、1960年代後半～1970年代に行われた農地基盤整備事業では、農業用水路を掘削した際に、多量の須恵器や土師器、木製品などが出土した記録がある。

過去の調査地点を第１図に示す。昭和52年、自衛隊静浜基地の整備に伴って初の正式な発掘調査が行われた。昭和55年にも自衛隊静浜基地の整備に伴って発掘調査が行われ、下記のような成果をあげた。

- 弥生土器の包含層を発見し、藤守遺跡が弥生時代までさかのぼることを確認した。
- 調査区のほぼ全域で須恵器、土師器、陶質土器などが大量に出土した。
- 大きな柱痕が出土し、真言宗八幡山法雲寺跡と推定された。
- 古代条里に沿った畦畔を検出した。
- 古墳の石室構築材と思われる玉石がまとまって出土した。

平成12年の調査では、古墳時代終末期～奈良時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡や井戸が検出され、須恵器、土師器、馬鍬、鋤先などの木製品が出土した。また、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物跡や土師器、陶磁器なども発見された。

平成14年度の調査では、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物跡や井戸、墨書のある山茶碗が発見された。

平成16年度の調査では、鎌倉時代～近世の掘立柱建物跡や土坑、山茶碗や漆器などが発見された。

平成20年度の調査では、平安時代の掘立柱建物跡や土坑などを検出し、灰釉陶器や土師器、金属製の紡錘車などが出土した。

参考文献

『大井川町史』上巻　大井川町史編纂委員会　1984年

第２図　周辺遺跡分布図

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

１　現地調査

今回の調査面積は208㎡である。調査にあたって平面直角座標第Ⅷ系に基づき、10m幅のグリッドを設定した。調査区が狭く、グリッドに番号や記号を付けて調査区を細分する必要がなかったため、グリッド番号は設けいていない。

現地の現況は休耕田で、周囲には水田が広がっている。確認調査時に湧水が認められたため、発掘調査では湧水対策が重要になると予想した。

表土除去はバックホーで行い、遺構検出面直上まで掘り下げた。この時点で湧水があったため、調査区の周囲に排水溝を掘るとともにポンプを据え付けて排水したが、地下水が湧き出す他に、調査区の壁からも水が染み出してくるため、壁面の崩落防止にも気を使った。また、降雨時には周辺から水が流れ込んでくるため、その水をせき止めるのにも労力を使った。

測量は、トータルステーションとレベルを使い、1/100の全体図と1/20の遺構個別図を作製した。

写真撮影は、大判フィルムと中判フィルムを併用し、それぞれカラーリバーサルフィルムとモノクロフィルムを使って撮影した。調査区全体の写真撮影には高所作業車を使い、工程の記録とメモ写真等にはデジタルカメラを使用した。

また、現地調査と並行して基礎整理作業を行い、現地で遺物の洗浄と注記を済ませた。

２　資料整理

資料整理は、静岡県埋蔵文化財センターの島田事務所で行った。出土品の分類、仕分けを行った後、土器の接合と復元を行った。そして、実測の後、トレースを行ったが、トレースは遺構、遺物ともデジタルトレースにし、版組もパソコンで行った。出土品の写真撮影は、埋蔵文化財センターの写真室で行い、大判のモノクロフィルムを使って撮影した。

第２節　基本層序

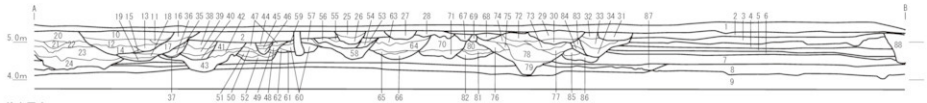
第４図に調査区西壁の断面図を示す。流路の断面が多くかかっており、基本層序がわかるのは断面の北半分弱である。基本層序のうち、１層は現水田の耕作土、２層は現水田の床土である。３層から７層は、中世以降の堆積層と思われるが、遺物を含んでいない。８層が奈良時代～平安時代の遺物包含層で、色も黒灰色で目立つ。１面目の遺構が８層の上面で検出できる。その下にある９層の上面では２面目の遺構を検出した。９層以下は無遺物層で、大井川が運んできた堆積物である。

この断面では、基本層序とともに流路の断面を検出したことが重要である。２層上面から切り込んでいる流路が９本、３層上面から切り込んでいる流路が20本検出できた。いずれも切り込んでいる面から考えて近世以降の流路と思われる。

第３図を詳細に見ると、今回の調査地点に大井川の支流が１本かかっており、今回の調査はこの支流を掘り当てた可能性が高い。しかし、その支流は第４図に示したように、十数本～数十本の流路が複雑に切り合って１本の支流を形成していることがわかる。

今回検出した流路は、近世以降と判断したため、調査対象からは外したが、流路内の堆積層には奈良時代～平安時代の土師器や中世の山茶碗などが含まれている。確認調査で出土した土器は、これらの流路に含まれていたものと思われる。

第３図　大井川支流分布図（『大井川町史』上巻掲載図を元に作成）



基本層序

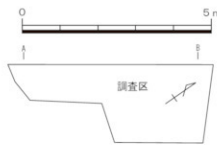
1 淡褐色土　現在の水田耕作土
2 青灰色弱砂質土　上面にマンガン沈着
3 青灰色砂質土
4 青灰色強砂質土　鉄分沈着
5 青灰色土　鉄分多い
6 青灰色弱粘質土　鉄分沈着
7 灰色弱粘質土　鉄分沈着
8 黒灰色粘質土　遺物包含層
9 灰色砂　無遺物層

2層上面検出流路

10 青灰色弱砂質土　上面にマンガン沈着
11 青灰色砂と灰白色粘土の互層
12 青灰色砂　灰白色粘土の薄い層をはさむ
13 青灰色砂質土　鉄分沈着
14 青灰色砂質土と灰白色粘土の互層
15 青灰色砂
16 青灰色土　上面にマンガン沈着
17 青灰色弱粘質土　鉄分沈着
18 灰色砂と灰色粘土の互層
19 暗灰色粘質土
20 青灰色砂質土　上面にマンガン沈着
21 青灰色砂　灰色粘土の塊を含む
22 青灰色砂質土
23 灰色砂と灰色粘土の互層
24 灰色砂と灰色粘土の細かい互層
25 青灰色土　上面にマンガン沈着
26 青灰色砂質土
27 灰色砂　上面にマンガン沈着
28 灰色砂　上面にマンガン沈着
29 青灰色土　上面にマンガン沈着
30 青灰色土　鉄分沈着
31 灰色砂質土
32 青灰色土　上面にマンガン沈着
33 青灰色土　鉄分沈着
34 灰色粘質土　灰白色土の薄い互い

3層上面検出流路

35 青灰色砂質土　鉄分で橙褐色に染まる
36 灰色砂と灰色粘土の互層
37 灰色粘質土
38 青灰色土
39 青灰色砂質土　鉄分沈着
40 灰色砂と灰色粘土の細かい互層
41 青灰色土
42 青灰色砂質土
43 灰色砂　灰色粘土の薄い互層をはさむ
44 灰色土
45 灰色砂質土
46 灰色砂　鉄分で橙褐色に染まる
47 灰色砂質土　白色砂の薄い互層をはさむ
48 青灰色砂質土
49 青灰色砂質土　鉄分で橙褐色に染まる
50 青灰色粘質土
51 青灰色砂質土
52 灰色粘質土
53 青灰色土
54 青灰色砂質土
55 青灰色土
56 青灰色砂質土
57 青灰色土　鉄分で橙褐色に染まる
58 青灰色粘質土
59 青灰色土
60 青灰色砂質土
61 青灰色砂　鉄分で橙褐色に染まる
62 灰色土
63 青灰色土　マンガン沈着
64 青灰色弱砂質土　鉄分沈着
65 青灰色砂　鉄分沈着
66 淡灰色粘質土
67 灰色砂　下半分に鉄分沈着
68 灰色砂　灰白色粘土の薄い互層をはさむ
69 灰色砂と灰色粘土の互層
70 青灰色土
71 灰色粘土と灰色砂の互層
72 灰色土　マンガン沈着
73 暗灰色土
74 灰色弱砂質土
75 淡灰色土
76 青灰色土　マンガン沈着
77 灰色土　鉄分沈着
78 青灰色土と灰色土、橙褐色土の混層
79 灰色粘土
80 青灰色土　鉄分沈着
81 青灰色砂質土　鉄分沈着
82 青灰色粘質土
83 灰色砂質土　鉄分沈着
84 灰白色粘土
85 灰色砂　鉄分で橙褐色にそまる
86 灰白色粘土
87 暗青灰色土、灰色土、灰白色土の混層
88 灰色砂、灰色粘土、褐色砂の互層



第4図　調査区西壁断面図

第３節　発見された遺構と遺物

１　調査１面目

自然流路01

調査区の中央付近で検出した不整形の流路跡（第５図）で、検出できた深さは20cm弱である。本来はもっと上から切り込んでいたのかもしれない。東西方向に流れていると思われるが、形は一定でなく、東側では急激に幅が狭くなっている。埋土は淡灰色土の１層で、遺物包含層の黒灰色土に淡灰色土の埋土が見えたため、検出は容易であった。

この流路からは第８図－１に示した土師器の高坏が出土した。坏の部分には、粘土のつなぎ目が消えきらずに残っている。口縁部はつまみだすようにして引き上げているため、器壁が薄くなっている。脚部は全体的に厚く、外面には縦方向になでた痕跡が見られ、坏との接合部には指頭圧痕が見られる。脚部内面は工具を使ってらせん状になでており、工具痕が明瞭に残っている。平安時代の高坏と思われる。

溝01

調査区の南端で検出した溝である（第５、６図）。自然流路が北西～南東方向に流れているのに対して、これは自然流路に直行する方向に流れているのと、第６図下段に断面を示したように二段掘りになっていることから、自然流路ではなく、人工の溝と考えた。この溝で特記できるのは、10層と12層に炭化した有機物を多く含んでいることである。有機物の内容は未分解の植物遺体と思われ、これを含んだ10層と12層は黒っぽい色で目立っている。有機遺物を含んでいると期待されたが、遺物は出土しなかった。

２　調査２面目

自然流路02

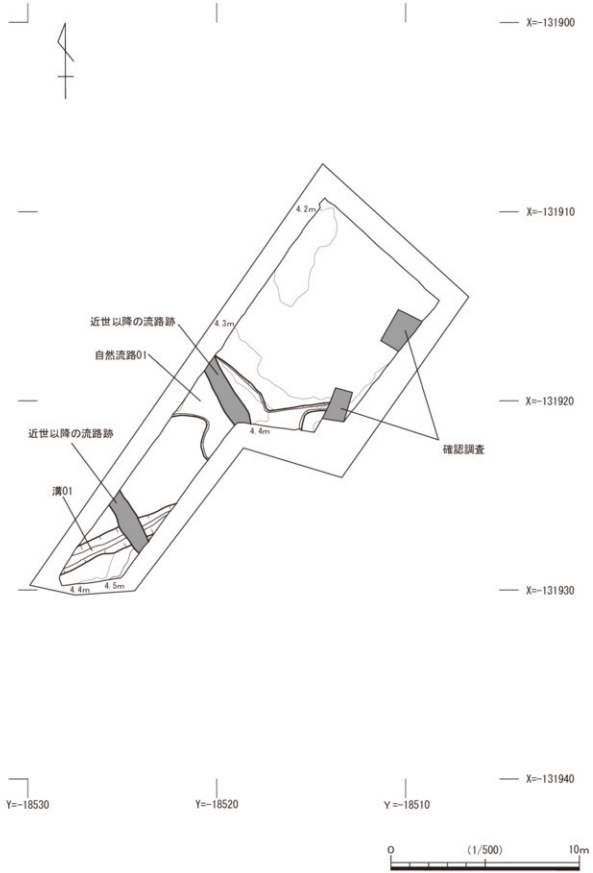
２面目では、自然流路を検出した（第７図）。検出できた深さは10cm程度で非常に浅い。そのため平面形も一定していない。この流路からは第８図－２の土器が、その場で割れた状態で出土した。頸の短い壺で、古墳時代前期になると思われる。風化が進んでいるため、表面の観察が難しいが、胴部下半に、時計回りのらせん状に刷毛目が見られる。土器を正立させた状態では、この部分は調整できないため、土器を倒立させるか、小脇に抱えるような状態で、底から土器上部に向かって調整したことがわかる。

３　包含層及び確認調査出土遺物

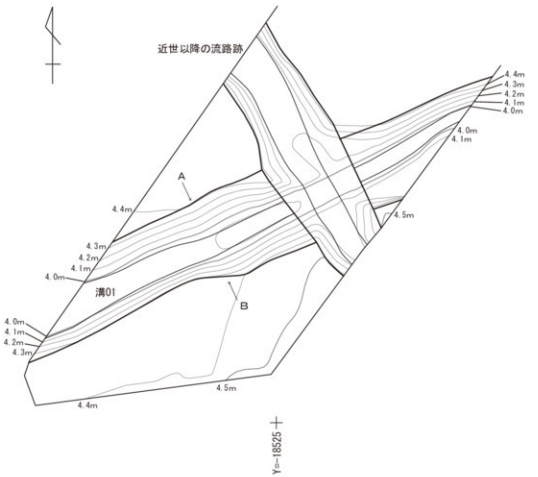
第８図－３は、確認調査で出土した高坏の坏の部分で、風化が進んでいる。胎土は非常に細かいが、１mm程度の砂粒をわずかに含んでいる。平安時代の土器と思われる。４は高坏の脚部で、これも胎土が非常に細かく、砂粒を含まない。３と同じ地点で出土したが、胎土が異なる。これも平安時代の土器と思われる。５と６は、今回調査地の包含層から出土した甕の底部である。風化が進んでおり、時期は不明であるが、胎土に砂粒を多く含むことから、古墳時代以前と思われる。７は甕の底部で、胴部の重みで底土がつぶれて外側にはみ出している。時期は明らかにできないが、胎土に砂粒を多く含んでいることから、古墳時代以前と思われる。８と９は確認調査で出土した山茶碗で、旧流路跡に含まれていたと思われる。10は細粒砂岩製の砥石で、これも旧流路跡に含まれていたと思われる。

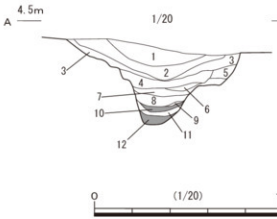
４　まとめ

今回の調査地点は、居住域が想定される微高地ではなく、大井川が形成した小支流の一部に当たっている。今後も調査データを重ねることで、微高地と支流の範囲を特定し、藤守遺跡の範囲を限定していく作業が必要であろう。



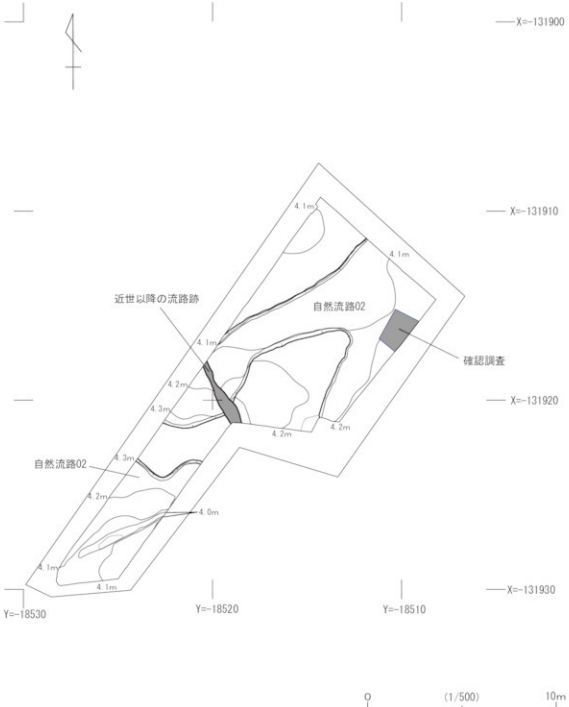
第５図　１面目遺構分布図



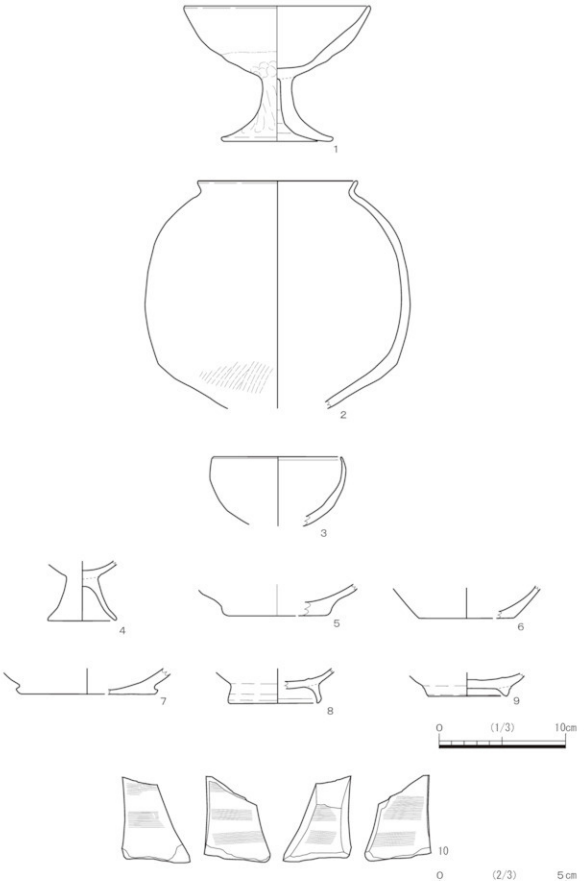


1　青灰色砂質土　炭化した有機物を多く含む。
2　青灰色粘質土　砂を含み均質
3　青灰色粘質土
4　青灰色粘質土　硬く閉まっている
5　暗灰色粘質土　目立つ
6　明青灰色粘質土　均質
7　青灰色粘質土　砂を含む
8　青灰色粘質土　炭化した有機物を含む
9　青灰色砂質土　細かい砂の層
10　暗青灰色粘質土　炭化した有機物を多く含む
11　暗青灰色粘土
12　青灰色粘土　炭化した有機物を多く含む

第６図　溝01平面図・断面図



第７図　２面目遺構分布図



第８図　出土遺物

写真図版

写真図版 1

調査区全景（北側眺望）

1 面目完掘状況

写真図版３

基本層序

溝01完掘状況

写真図版５

溝01断面

流路群断面

自然流路02

自然流路02遺物出土状況

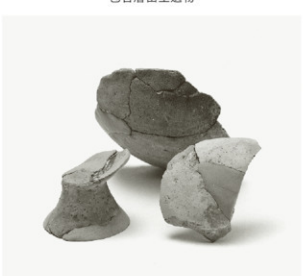
写真図版７

自然流路01出土遺物

自然流路02出土遺物

包含層出土遺物

確認調査出土遺物１



確認調査出土遺物２

確認調査出土遺物３

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ふじもりいせき ご
書 名	藤守遺跡Ⅴ
副 書 名	静浜基地（23）埋蔵文化財調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第17集
編 著 者 名	富樫孝志
編 集 機 関	静岡県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒422－8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20　TEL 054－262－4261（代表）
発 行 年 月 日	2012年2月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地形				
ふじもりいせき 藤守遺跡	しずおかけん 静岡県 やいづし 焼津市 ふじもり 藤守 706－1	22212		34° 48′ 37″	138° 17′ 52″	20110713 ～ 20120229	208㎡	航空自衛隊静浜基地整備に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤守遺跡		古墳時代 平安時代	自然流路１本 自然流路１本 溝１本	土師器 土師器 土師器	

要 約	大井川が形成した網目状の支流の一部を発掘調査し、古墳時代と奈良～平安時代の流路と溝を検出した。集落の周辺域と思われる。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第17集

藤守遺跡Ⅴ

静浜基地（23）埋蔵文化財調査報告書

平成24年2月24日

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20
TEL　054－262－4261（代表）
FAX　054－262－4266
印　刷　所　みどり美術印刷株式会社
〒410-0058　沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL　055－921－1839（代表）